

企画書

レトロ 前時代的喫茶店へようこそ

<企画意図>

チェーン店が占拠する東京の街は、いまやどこに行っても同じ風景。だが、なんの特徴もないのっぺらぼうな街並みにひととき異彩を放つ、ペンキがはげかけた喫茶店の扉を開ければ、タバコのヤニで燻され黒光りする壁にマスターの趣味で撮った風景写真が並び、マイルス・デイビスの泣きのトランペットに柱時計の振子の音がセッションする——昭和のごくありふれた時が流れている。

こじんまりしていて雰囲気が良く、分煙や長居にもうるさくない。雑誌や本が充実していて、カップや調度品がちょっと凝っている。無愛想そうだけど話し掛けると気さくなマスターが丁寧に淹れてくれるコーヒーは、程よく苦くてなにげに美味しい。たまに食べるランチのナポリタンはどこかおふくろの味に近く、自家製のアップルパイを頬張れば誰もがほっとできる。細く長く客から愛される“光るもの”を必ず持っているから、レトロな喫茶店は侮れない。

昭和にはありふれていたそんな喫茶店は、カフェやコーヒースタンド、ファストフードやファミレスに押されて、いまや懐かしくも新鮮なスポットになってしまった。東京が全国に誇る喫茶店文化。それは気分次第、またはTPOによって使い分けたくなる、個性豊かな喫茶店があればこそ、成立するものである。純喫茶、画廊喫茶、名曲喫茶、はたまた店構えや店内に漂う空気、ランチやスイーツなどの逸品、そしてコーヒー筋で勝負する正統派・・・時代に取り残されたように駅前や街角にたたずむ古き良き喫茶店が、少しずつだが確実に姿を消していつているのは惜しむべきことである。

カフェでは満たされない。コーヒースタンドでは味気ない。だから今、世間は喫茶店に注目し回顧している。そこにあるのはノスタルジーではなく、喫茶店文化消滅への危惧と何物にも代えがたい「一杯 500 円のかけがえのない時間」。

打ち合わせに、営業のついでに、今度の休みに——わざわざ遠出してでも行きたくなる喫茶店は、今こそ必要とされている時ではなからうか。

<企画内容>

- ・紹介する店舗は原則都内限定とする

- ・開店のいきさつ、客筋やマスターの人柄、店内の雰囲気、店主のこだわりなど、グルメ雑誌の特集では軽視されがちな部分にスポットを当てる
- ・店舗だけでなく付近の街のたたずまいも紹介する

<構成案>

昭和の面影色濃いレトロ喫茶店

絶品ランチの喫茶店

気合の喫茶店モーニング

マスターの笑顔に癒されたい！

趣味人万来

是非もののスイーツ喫茶

長居歓迎

文豪が愛した喫茶店

羽島、大垣、一宮 喫茶の街を往く

<発行時期>

2010 年 11 月下旬